

この詩碑は中国蘇州寒山寺境内に建っている有名な「楓橋夜泊」（張継詩・愈樾書）の石碑。当館山寺と寒山寺は平成十八年九月六日友好提携を結び、その記念として、中国寒山寺境内に建っている詩碑をそのまま複製し、平成十九年五月十六日建立。

この後に伊藤博文が明治三十八年に同じ梵鐘を寒山寺と館山寺に贈ったことが書いてありますが、紙幅の関係で省略します。最後に「浜名湖畔 曹洞宗館山寺」と記されています。

今は寒山寺のホームページ（中国語版）、館山寺ホームページもあり、パソコンやスマホからアクセスできますが、やはり実際に行ってみたら、何か発見があるかもしれません。

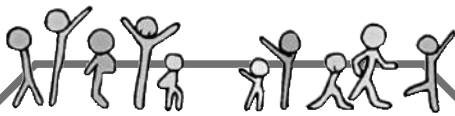


浜松・館山寺「楓橋夜泊」詩碑
(2017年早春)

<http://www.hanshansi.org/news/> 寒山寺HP（中国語版）

<http://kanzanji.net/> 館山寺HP

(2018年5月1日現在のアドレス)



タイ古典文学を撫でてみよう!

国際コミュニケーション学部
加納 寛

タイの古典文学を読まれたことがあるだろうか。「タイ語が読めねえのに、そんなん読んだことある訳ないじゃん!」という声が聞こえてきそうだが、他国の古典文学を読むとき、その国の言語は必須条件だろうか? 皆さんは、シェークスピアとか、英語で読んだのかな? 多くの人は日本語で読んだはず（私もです）。

タイには、詩聖ストーン・プー (สุนทรภู่



ストーン・プー像(後方)と彼の作品の登場人物プラアパイマニーの像

1786-1855) など、世界に誇ることができる文学者が多数存在している。もしタイがイギリスのように世界を席卷していたら（そんな状況には今後もならないと思うけど）、ストーン・プーはシェークスピアが得ているような名誉を与えられ、誰もがその章句を唱えることができるような存在になっていただろう。

ストーン・プーは、18世紀後半に生まれ、19世紀に幾多の作品を残した人物である。下級役人として王宮に仕えたが、王宮の女性との恋愛沙汰で投獄されたり、結婚と離婚を繰り返したり、酒癖が悪かったりして、何度も投獄されたり追放されたりする波乱の人生を送った。よい子は決してマネしないように。

しかし、平民出身で平易な語彙や押韻を用いたストーン・プーは、庶民にも文学を広めるのに貢献し、大いに愛されている。作品としては、紀行詩などがあるほか、物語としては、『プラアパイマニー (พระเอกภัยมณี)』などがある。また、共作としては、『クンチャーン・クンペーン (ขุนช้างขุนแผน)』などがある。それまでの文学作品の主人公が王族などに限られていたのに対して、『クンチャーン・クンペーン』では、王族ではない人々が主人公となり、庶民が活き活きと描き出されていて、とても面白い。武術の達人でめっちゃイケメンでカッコいいけ



左は子供用の『クンチャン・クンパン』、
右は『プラロー』

ど浮気者で浮き沈みの激しい男クンパンと、めっちゃ金持ちで一途だけどハゲでデブな男クンチャン（この紹介の仕方だと性格がいい人に思えるかもしれないが、クンチャンの性格は決してよくはない。友達にはなりたくない）、そして2人の間で揺れ動く女性ワントーンの、3人の幼なじみたちの波乱万丈の生涯を描いている。あなただったら、どっちの男がいいですか？（私はどっちも嫌だ。）

タイ留学時代に論文を書くために読んでいた古典文学は『プラロー（ลิลิตพระลอ）』である。これは、ストーン・プーよりはるかに古い時代に、タイ北部の民話をもとに作られたとされる悲恋物語であり、タイの『ロミオとジュリエット』とも呼ばれている。留学時代、タイ前近代における精霊信仰の政治利用について調べていた私には、『プラロー』に活写された呪術師たちの活躍や精霊同士の戦いの様子が、とても魅力的に映ったものである。

主人公プラロー王（王といっても、盆地世界の小さな「クニ」の「王」なので、実質的には村長さんのようなもの）は、とてもイケメンで、その評判は近隣の国にも轟いていた。隣の敵国の2人の王女（モチロン絶世の美女である）が、その評判を聞いてプラローに恋い焦がれ、呪術師を使ってプラローを自国に呼び寄せようとする。プラローの国でも、敵国から呪術攻撃を受けていることが察知され、呪術師が敵の呪術を妨害するが、結局は精霊同士の戦いに負け（この精霊同士の戦いの描写が面白い。巻き込まれたら嫌だけど）、プラローは術にかかって敵国

の王女に恋い焦がれ、妻を残して国を去ってしまう。険しい道を越えて敵国に到着したプラローは、王女たちとの甘い逢瀬を楽しむが、それを王女たちの父、すなわち敵国の王に知られ、急襲される。プラローと王女たちは刺客と戦い共に壮烈な死を遂げるという物語。儒教的道徳のなかで育ってきた我々としては、そもそも国や妻を捨てて恋愛のために敵国に行ってしまうという主人公の行動に首を90度ほどひねらざるを得ないが、そのあたりは1万3千歩くらい譲って読んでいただくと、プラローの苦悩に心震えるかもしれない。

タイ古典文学には、『ラーマキエン（รวมเกียรติ: ラーマヤナのタイ版）』や『ウェーサンドン（布施太子）本生（มหาเวสสันดรชาดก）』など、壁画や舞踊として楽しむことができる古典文学作品も数多い。これらは、目で見ても楽しむこともできるので、まずは筋を知ることをおススメする。上述の『クンチャン・クンパン』を含めて多くの古典文学作品が読みやすく紹介されている、富田竹二郎編訳『タイ国古典文学名作選』（井村文化事業社、1981）がおススメ。愛大の豊橋図書館にあるので、探してみてください！

タイの古典文学は、韻文であることが多い。さらにタイ語は中国語と同様に声調がある言語である。したがって、タイの古典文学は、音がとても美しい。古典文学の音読CDは、タイ国内の学校教材のお店で「国語」の副教材として売られているので、聞いてみるとよいだろう。さらに、タイ文字が流暢に読めるようになったら、実際に読んでみると、耳と口が幸せになる。楽しんで！



王宮寺院のラーマキエン壁画